

ORORO
SAPS

さっぽろ 東本願寺

No,245

2026 3月号

行事報告	01
雲龍柳	02
今月のことば	03
お寺さんに聞いてみよう	04
門徒のおしごと	05
ひがほんっ子だより	06
法話 藤井 慈等	07,08
無盡蔵	09
連載 近代の教学者	10
すすきの探訪ツアー	11
共生	12
おしらせ	13,14

すすきのに響く

初鐘の音

初鐘（除夜の鐘）に300人

歩みを正しく直す修正会

12月31日、午後11時半から札幌別院境内の鐘樓堂で毎年恒例の初鐘（除夜の鐘）が行われた。別院の鐘樓堂は普段は一般開放されていないが毎年この時には一般参詣者に鐘樓堂に上がってもらい鐘を撞いて頂いている。

定刻になるとまず初めに坂田智亮輪番が鐘樓堂に上がり一打目の鐘を撞き、続いて列に並んだ約300名の参詣者が順次上がって鐘を撞いた。近年は外国の方の参詣も多く日本の正月の風景を楽しんでいる様子だった。

年が明けた翌1月1日0時より本堂にて修正会が勤められ、90名ほどの参詣があった。また、勤行中にも本堂には入れ代わり立ち代わりお参りがあり、多くの人が年のはじめに御本尊に手を合わせていた。

勤行後には坂田輪番の年頭の法話があり、最後まで参詣した方々には温かい飲み物を持ち帰っていた。また、別院では鴨々川ノスタルジア主催の鴨ノスタンプラリーに協力しており事務所にはスタンプを集める参拝者も多く訪れにぎやかな年の瀬となった。



▲境内



▲1打目を撞く坂田智亮輪番



▲鐘を撞く人たちの列



▲歳暮勤行の様子



▲修正会本堂内の様子

別院坊主めぐり



私は士別市にある教證寺というお寺で生まれ育ちました。高校を卒業すると同時に18年間過ごした地元を離れ、京都市にある大谷大学に入学しました。真宗学科という学科で親鸞聖人の教えや、様々な仏教の経典について4年間勉強させて頂きました。勉強していく中で感じたのは、自分は「人との関わりの中で大事な事を素通りし続けて生きてきたのではなかったか」という事です。今後このことを自分の問いとして考えて続けていこうと思います。

札幌別院に奉職させて頂いて、早くも1年目が終わりに差し掛かっています。これからも南無阿弥陀仏の教えを大切にしながら、札幌別院の様々な活動に励みたいと思います。

ちなみに趣味は、好きなサッカーチームであるSSCナポリの試合を観戦することと、好きなアーティストのレコードやCDを集めることです。最近では宇多田ヒカルのファーストアルバムを買いました。これからどうぞよろしくお願いたします。



てらさわ しおん
寺澤 至恩

2002年10月15日生まれ

冬の朝市

〜ひがほん暮らしの朝市



2月8日、当別院開基・現如上人の御祥月法要に併せて、2026年初の暮らしの朝市が開催された。昨年6月より始まった朝市であるが、出店者、来場者から冬季開催の熱い要望があり、それに応える形で、試験的にロビーと大谷ホールを会場に朝市を実施した。

今冬の札幌は記録的な大雪に見舞われたものの当日は天候に恵まれ、今では定番となったコーヒーやパン、手作り雑貨などを販売する47店舗が会館内に並び、開場と共に多くの来場者で賑わった。

出店者からは、「北海道の冬は厳しいので、こうした朝市を開催する機会が中々ない。だから冬でも開催して頂ける事は非常に有難い」という声が聞こえた。スタッフの話では、継続して参加しているお店が増え、また、SNS等での広報活動が少しずつ功を奏して、「ひがほん暮らしの朝市」が地域の方々にも認知して頂けるようになり、それぞれのお店にも固定客が出来てきたとの事であった。

総じて、改めてお寺で行う朝市の魅力、ポテンシャルの大きさを感じると共に、益々朝市をご縁としてお寺が新たな人と人との繋がり場となれば幸いである。



▲ひがほん暮らしの朝市

雲龍柳

うんりゅうやなぎ

1月は行く、2月は逃げる、3月は去ると言われてきたが、「光陰矢の如し」兔に角、月日はあつという間に過ぎていく▼年明けから、国内外ともに慌ただしく未来への希望の兆しが見えてこない。唐突に始まった衆議院選挙で「日本列島を強く豊かに」を訴え、「総理は私でいいのか」と力説して、厳寒の雪の中、高市自民党は圧勝した。小選挙区制は二大政党を見据えてのことであったとは認識の誤りなのか。健全な緊張感と謙虚な姿勢が損なわれることを憂い「力による平和」と言って憚らないトランプの姿勢を模倣するが如き行動が、顕著に現れないことを願うばかりである▼例年にまして今年には日本中の積雪量が半端ではなかった。九州育ちの私は、まさに「雪は音を奪い、寒さは動きを奪う」これが実感である。北国の冬の現実はともかく辛く、夏も冬も大胆なふるまいを見せる気候変動は人間の手垢の産物であろうか？▼一方、冬季オリンピックのために準備を整え栄えある栄冠を手にしたメダリストは、勿論、賞賛されるべきであるが、メダルに辿り着けなかった多くの人々が存在していることも忘れてはなるまい。努力は必ず報われるとは限らない。結果に捉われず選んだ道を歩いたことが、その人自身の大きいなる財産になることを願う▼選挙の翌日2月9日は、吉水教団の弾圧によって住蓮と安楽が819年前、賀茂の河原で死罪になった日である。人びとのさやかな希望を国家権力、いや権力者の私憤によって断罪するという暴挙が起こっている。宗祖親鸞聖人は流罪から50年後、夢告にて「弥陀の本願信ずべし 本願信する人はみな 撰取不捨の利益にて 無上覚をばささるなり」と感得され、ともなる地平を見極めておられる。

(坂)

ただ
この高僧の説を
信ずべしと。

今月のことばは、『正信念仏偈』の最後の一句「唯可信斯高僧説」を書き下した言葉です。

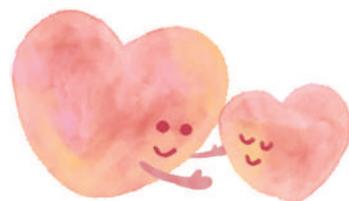
『正信偈』は親鸞聖人の主著である『教行信証』の中に説かれた「偈文」ですが、「親鸞聖人のよろこびの偈である」と元大谷大学名誉教授の安富信哉先生に教えて頂きました。本願念仏の教えは釋尊をはじめ、印度の龍樹菩薩・天親菩薩、中国の曇鸞大師・道綽禪師・善導大師、日本の源信僧都・法然上人ら七高僧の御苦勞が無ければ時空を超えて私のところまで頂くことはなかった、という「よろこび」です。

私は在家門徒の家の生まれであり、毎月のご命日にはお手次のお寺からお参りに来て頂いておりました。幼少のころは、ご住職が来られると祖母の隣に座らされて一緒に『正信偈』をお勤めしていました。普段は厳しかった祖母がその後だけは優しくなったことを懐かしく思います。思い起こせば、その経験

があったからこそ、今の私があるのだと気付かされます。

宗祖親鸞聖人が本願念仏に出遇い、釋尊や七高僧への報恩の念をこめて「唯可信斯高僧説」と締めくくった「よろこびの偈」は、多くの御縁あって祖母に受け継がれ、祖母の手を合わせる姿を見て育った今の私にたどり着きました。毎日お勤めしている『正信偈』は、私までたどり着いた「いのち」のよろこびの表現でもあります。一日一日、その事に照らされた生活を送る事が仏恩報謝ということだと思えます。

駒田 健治



お寺さんに

聞いてみよう！

修行？



真宗大谷派のお坊さんは修行をするのですか。

A.

みなさんは一般的に修行と言われてどのようなことをイメージされますか。仏教において修行をする目的は、苦しみから解放され、悟りを得ることです。

真宗大谷派の僧侶は、山に長い間籠って滝行をしたり、断食や不眠、何日もの間、山道を練り歩いたりするということはありません。それは我々の宗祖である親鸞聖人のご了解にならったことです。親鸞聖人は29歳まで比叡山延暦寺において堂僧として煩惱を断ち切る為に様々な修行をしていました。

しかし親鸞聖人は厳しい修行を行い、様々な努力をしても煩惱が消えず、それどころか自分の中から湧き出てくるその煩惱によって身を煩わされ心を悩まされ続けていました。そこで親鸞聖人は煩惱を消すことができない身でも救われる道を求めて長年過ごしてきた比叡山を降りて、法然上人のもとを訪ねました。

法然上人は親鸞聖人にただひたすら念仏を称えることこそがどんな修行よりも最も大切であると

説きました。そして親鸞聖人は「南無阿弥陀仏」を称えることによって、どんな時でもどんな場所においても誰しものがみな平等に救われるというお念仏の教えに出遇いました。この出遇いにより今まで比叡山でしていた自分自身の努力や行いを頼りにして救われていく修行を捨て、阿弥陀仏のはたらきによって救われていく本願念仏の教えを拠り所としました。そしてそのような仏道を親鸞聖人は、浄土真宗と開かれていかれたのであります。

このように親鸞聖人を宗祖といただく真宗大谷派は、「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えることを最も大切にし、生活の中心として頂いてきました。みなさんがイメージするような厳しい修行は行なわれないかもしれません。自分の力によって救われる修行ではなく「南無阿弥陀仏」と称え、阿弥陀仏のはたらきによって救われる念仏のいわれを聞き続けていくことが、真宗大谷派の僧侶として大切にしていかなければならないことなのです。





創業当時のかね彦



かね彦板付け



かね彦『つるの子』巻



中島代博社長

蒲鉾のかね彦

〒003-0006

札幌市白石区東札幌6条1丁目2-26

かね彦工場直売店：8時30分～16時00分

定休日：土・日・祝日・不定休

電話：(011)823-1181



門徒のおしごと
 蒲鉾のかね彦

蒲鉾を作り始めて100年以上。札幌市白石区東札幌で蒲鉾の製造、販売を行う「株式会社かね彦」を紹介する。元々かね彦は1899（明治32）年に札幌二条市場で魚屋として開業された「中島鮮魚店」であった。その後、魚を取り扱うノウハウを生かし、1918（大正7）年に蒲鉾を提供する「かね彦商店」が誕生した。現在は第7代目である中島代博なかしまとしひろさんが代表取締役を務めている。東札幌にある工場で製造された魚のすり身は道内のみならず本州にも出荷されている。また、加工された蒲鉾は学校の給食にも提供されている。蒲鉾と言えば板かまぼこを想像するが、かね彦では北海道の素材であるカニ、イカ、ホタテ、サケ、とうきび等を生かしたアイデア商品にも取り組んでいる。最近では道内に生息するシマエナガをモチーフに「かまエナガ」という商品が開発された。かね彦の蒲鉾は直売店、市内のスーパー、オンラインショップで購入することができるので、一度は味わって頂きたい。



かね彦『かまエナガ』
 (2023年秋新発売)



かね彦『スモークチーズハム KAMABOKO』と
 『きびっこちゃん』



かね彦のかまぼこ



子どもも会

年末恒例 お餅つき大会!

12月28日、毎年恒例のお餅つきが行われました。当日は21名の子どもたちが参加し、本堂にてお勤めをしてから、大谷ホールへ移動しお餅をつきました。

大谷ホールに到着するとすぐに、蒸されたお米が臼へ運ばれ、それを見た子どもたちはこれからはじまるお餅つきへの期待に胸を膨らませていました。もち米を潰す作業はかなりの力が必要なので職員で行いましたが、子どもたちは米粒ひとつひとつが徐々につぶれて見えなくなり、表面が滑らかになっていく様子に見入っていました。

もち米の粒が完全に見えなくなったら、いよいよお餅つきの始まりです。列を作り順番にひとりずつお餅をつきます。杵を重たそうに持ち上げながらも、「べったん、べったん!」と一生懸命ついでいました。

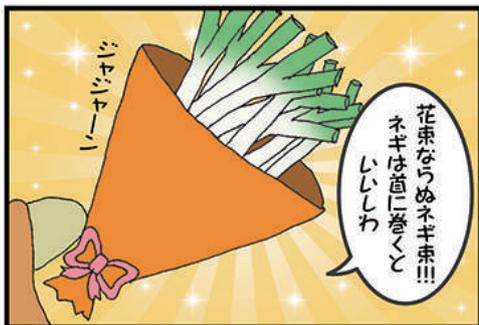
お餅つきあがったら今度は、仏さまにおそなえするためにお餅を丸めていきます。職員が適当な大きさに切り分けたものを子どもたち



ガひわちゃんのゆる〜い日常

第8話

カゼの特効薬



が手に取り、上手に丸めてくれました。実は子どもたちとは別に職員も餅つき機でお餅を作っており、最後に職員が用意したお餅をみんなでいただきました。砂糖醤油ときなこで味付けされたお餅はとても美味しく、子どもたちも笑顔で2025年最後の子ども会を締めくくることができました。

法話

「愚禿」ぐとくを名のった親鸞の課題

ある時、テレビをつけるとガザ地区で戦災にあつた人々の写真を撮って世界に発信しているパレスチナの青年のニュースを放送していました。青年は子どもどころからイスラエルに反感を持って育ちましたが、日本人の精神科医の方に出会い人間に優しさがあることを教えられ、優しさを育まれていき、ガザの人々の悲惨な様子を世界にインターネットを使い発信し続けてきましたが、ある日イスラエルのドローンに殺されてしまいました。

救われ難いイスラエルとガザの戦争のすがたを目の当たりにしながらも、一方日本では戦後80年を経て戦争経験がない世代の方々が政治を動かして平和の礎がぐらついている。そういう時代背景の中で仏法を聴くことはどういうことなのでしょう。私たちは親鸞聖人の門徒だと名告ってはいますが、本当に救いがあるのか。頭では考えていないかもしれませんが、皆さんが身の内から湧き出てくる不安が問いかけているのではないのでしょうか。和田稠先生は「一人幸せな者がおるとその陰で泣いている者がいる。そのことに気が付かないのだ」と仰いました。高度な経済成長を遂げる国がある一方貧しい国々がある。そんな

時代に救われたというのはおかしいのではないかという問いを投げかけてくださいました。親鸞聖人も救いとは何かという問いを抱えて比叡山に飛び込まれたわけです。

いのちは誰のものか

信國淳先生は「いのちは誰のものか」という言葉を遣されました。皆さんのいのちは誰のものでしょうか。いのちは「私」のものだ、私の好き勝手に出来るのだと考えますよね。この「私」という曲者がここにいます。この物差しで仏法を聞く。「私」の救いに胡坐をかいて陰で泣く人がいる事には気が付かない。親鸞聖人もこの「私」に突き当たったのではないかと思えます。比叡山の足元には狐、すなわち、いしかわらつぶてのような生活をしている人たちがいる。一方自分は清らかな修行や学問の生活のなかで聞く仏法とは何なのか。仏教に救いを求めるとはどういうことか親鸞聖人が教えてくださっている。

そこで今回「愚禿を名のった親鸞の課題」とい

う講題にさせて頂きました。ご承知のように親鸞聖人は29歳の時法然上人と出会い、35歳までお念仏を喜ぶ生活を送っておられました。が念仏弾圧という法難に会います。これが親鸞聖人の人生の大きな転機となります。この法難で越後に流罪になって放免されるまで5年間生活しておられます。私も親鸞聖人が立った新潟の浜辺に行ったことがあります。当時の越後では都育ちの親鸞聖人の言葉も通じてなかったのではないかなと思います。30数年の都での生活を捨てて越後のいなかの人々と共に生活する中で名のられたのが「愚禿釋の鸞」です。「愚禿」の禿とは禿げ頭の事ではなく、修行を怠って髪の毛を剃らずにいる状態を言います。つまり落第坊主のことです。「愚禿釋親鸞」とは仏教から落第したのだ、どこに落第したのかといえれば民衆に落第しいしかわらつぶての生活を送った。つまり救われぬという世界にたどり着いたということ。です。

愚者になりて往生す

『歎異抄』に「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり」とあります。「往生をとぐる」とはいのちを全うしたということ。和田先生は「全く救いようのないこの身に、よし生きていくといのちを頂く」のが往生であると教えてくださいました。また親鸞聖人は法然上人から語られた「愚

者になりて往生す」というお言葉を生涯大切にされました。愚者の反対は賢者です。法然上人は読み書きも出来ないような人が参るのを見て「あの人は必ず往生する」と微笑み、賢そうな偉そうな人が参るのを見て「あの人は往生できるだろうか」と心配したそうです。私たちの本山では御影堂の高いところに偉い方として親鸞聖人を座らせていますが、愚禿という名のりを忘れて親鸞さまを流罪にしてはいないでしょうか。

「いのちは誰のものか」という時代に私たちは生を受けて、改めて愚禿を名のった親鸞聖人、どこか遠くにいる親鸞聖人ではなく、ひとつのいのちを共に生きようと呼びかけてくださる親鸞さまに出遇わなければなりません。

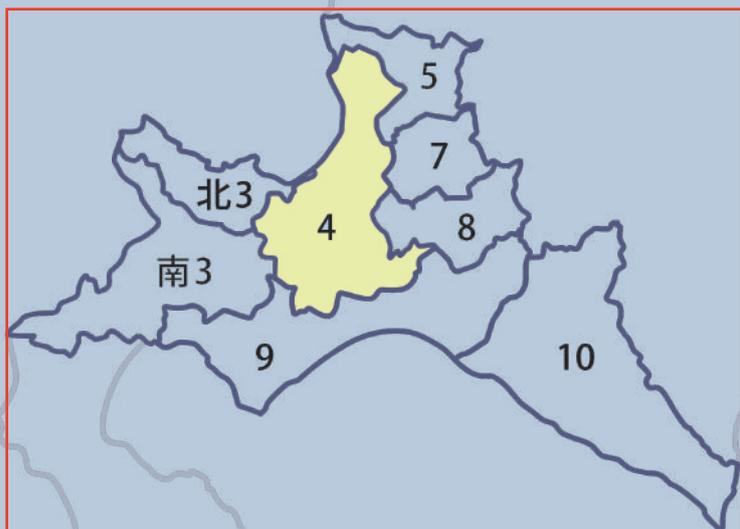


藤井 慈等 (ふじい じとう)
三重県 慶法寺

本稿は2025年10月の
報恩講(後半)の法話要旨です。

無盡蔵

崇敬区だより



カルト問題と私たちの生活

社会教化学習会

札幌市が属する北海道教区第4組には、若手僧侶で構成される教化委員会があり、その中の社会教化部門主催の社会教化学習会が1月26日に開催された。

今回、学習会で取り上げられたのは昨今話題となっている「カルト問題」についてである。2022年7月に起こった安倍元首相銃撃事件以降、カルト団体と政治の関係等が現代社会の問題として取り上げられ、マスコミでも連日様々な報道がなされた。その中でも二世信者と呼ばれる方々の生い立ちや現状が大きな話題になっており、真宗大谷派においても『同朋新聞』等で特集や対談の記事が組まれている。



今回の社会教化学習会は改めて「カルト問題」とは何かを考えるとともに、私たちは問題の本質を理解しないまま、いつの間にか「自分たちはカルトと関係ない」と傍観者になっていないかと問い直すことをテーマとした。学習会はフォーラム形式で講師に金沢教区の平野喜之氏をお迎えし、パネリストにはマインドコントロール研究所長のパスカル・ズィヴィー氏と昭法寺ご住職の伊藤孝順氏を交えて開催された。

カルトの問題性や被害の実情を学ぶことを通して「自分の家族や友人などとの人間関係を今どう生きているのか」そして「真宗の生活とは何を大切にしてきたのか」ということをお聖教の言葉に聞く大事な機会となったのである。

当日は、大雪で悪天候のなかではあったが、門徒会と寺属で40名程が参加され、熱心に聞き入った。これからも「カルト問題」は仏教徒である我々のすぐ身近にある問題として考えなければならぬと感じさせられた学習会であった。



第4組

大願寺 北 秀寛

連載企画「前に生まれん者～近代の教学者たち～」

願心随順の人

ふじもと まさき
藤元 正樹

藤元正樹は昭和から平成を生きた真宗教学者、僧侶である。真宗教学を現代社会の諸問題の中に見出し、実践へと導く指導的役割を担った人物である。また、嗜好の中に書や墨絵があり、三國連太郎作品映画『親鸞 白い道』標題を書いた。

縁起～生家にて～

昭和4年、兵庫県たつの市圓徳寺に7人姉妹のうち一人息子として生まれ、幼少期に大病を患い小学校を一年留年する。終戦間近、旧制中学生の時、病弱であった父を亡くした。

醍醐味な出会い

昭和24年、大谷大学にて生涯の友となる宮城顛、大河内了義と出会う。講義の際、遅れて入室し、やむなく隣に座った顛にチーズを分け与えた事により親交が始まったという。(顛談)三人はよく顛の自坊本福寺に入りびたり、ここで顛の父 智定や了義の父 了悟に出会い学びを深めた。

大地の会「呼応する本願」

在学当時、安田理深の学習会「大地の会」は、正樹はじめ多くの若手僧侶の登竜門的位置にあった。当初、会の雰囲気と反発したが、次第に理深の求道的思想に感銘を覚え生涯の師と仰ぐ事となる。理深亡き後もこの会を存続すべく、「展開する本願」の講題を継承した「呼応する本願」と銘打つ講義を13年間続け、「愚禿鈔講義」に至っては延べ18年間に渡り続けられ、講義集も発刊されている。

根がおりる

昭和28年、24歳で住職に就任する。昭和36年擬講となり、自坊を中心に活動した。また、顛の依頼から昭和51年より本山教学研究所、同和推進本部(現 解放運動推進本部)の本部員となる。

解放への祈り

和推進本部では『同身』の発刊に着手し、現在も大谷派教師必携書となっている部落差別問題学習テキスト『仏の名のもとに』を手掛ける。晩年に至るまで執筆活動や講演会などに力を注ぎ、後進の育成に努めた。前述してきた行動の背景は、「教えを聞いた者には聞いた者の責任というものがある」と語る程、常に、如来より賜りし願心に起因された行動なのであった。

藤元 正樹 (1929～2000)

兵庫県たつの市神岡町に生まれる

真宗大谷派圓徳寺前住職

元真宗大谷派教学研究所所員、元真宗大谷派同和推進本部委員

法名 還徳院釋正樹



藤元正樹 (本山より提供)



すすきの探訪ツアー

年の暮れ、聖夜を迎えるころ。薄野を歩く人々の足取りは忙しなく、街は光と音に包まれていた。私もまた、その流れの中にいた一人だった。しかし一本の電話を境に、賑わいは急に遠のいた。

病院に駆けつけると、人工呼吸器の規則的な音の中で父は静かに横たわっていた。医療チームの尽力により一命は取り留めたものの、臓器の一部はすでに殆ど機能していなかった。意識があるがゆえに、下の世話を他人に任せることへの抵抗も強かったのだろう。夜中に一人でトイレへ行こうとして転倒したと連絡が入った。また、昼夜逆転による^{せんもう}譫妄が強まり、拘束を余儀なくされることもあった。

もしかすると、ぽっくりと逝った方が、本人にとっては楽だったのかもしれない。それでも体調の良い日には、身体が固まらないようにマッサージをしながら、実家の今後や保険の話、葬儀の段取りまでを、冗談交じりに語りあう穏やかなひと時があった。

入院から一か月ほど経った頃、余命は一週間ほどだと告げられた。覚悟していた筈の言葉だが心が揺れた。気持ちを整えようと鴨々川沿いを歩いていると、不意に一羽の大きな白鷺が近くに舞い降りた。そして、私の歩調に合わせるかのように川辺を進みはじめた。



▲白鷺 (ダイサギ)



▲白鷺 (ダイサギ)



▲鴨々川、菖蒲池

無機質な薄野のビルの谷間を流れる小さな川の畔で、このような光景に出会うのは初めてだった。

サギという名は、「美しい」を意味する「さやけし」という古語に由来するそうだ。

万葉集には、水音の清らかさを幾代にもわたり語り継ごう、川が絶えないようにと詠んだ歌がある。人の生は儂く、街は変わり続ける。それでも川は流れ、時間は静かに進んでいく。

川が絶えないように——冬の水音とともに、その思いだけが静かに残っていた。



著 / 民衆史研究家 石川圭子

共生

アイヌ民族文化財団

理事長 **常本 照樹**



スポーツはことばや国境の壁を越え、人々の交流を促進して、多様な人々が互いを理解し尊重する共生社会の実現に貢献します。

昨年12月、台湾の高雄市とその近郊を会場として「世界先住民族伝統競技大会」が行われました。主催した台湾原住民族委員会の曾智勇^{そちゆう}主任委員は、同大会は「文化と競技の両立を目指しており、単なるスポーツイベントを超えて、言語・音楽・祭儀・文化交流のプラットフォームであり、世界の先住民族文化の出会いと相互理解の場」であると宣言しました。

この大会には、台湾原住民のほか、グアテマラ、ニュージーランド、フィリピン、アメリカ、カナダ、日本など9カ国から、28チーム約1100名の選手が参加して、アーチェリー、伝統舞踊、丸太切り、綱引き、レスリング、投網、カヌー、潜水、ロードレースなど、世界の先住民族の伝統的生活や環境、文化を反映した種目で力を競いました。

日本からはわたしたちアイヌ民族文化財団が招待され、13名の職員が7種目にエントリーしました。開会式では、美しいアイヌ伝統衣装をまもって堂々の入場行進を行い、満場の喝采をいただきました。競技では、伝統舞踊などでは日頃の技を發揮しましたし、ロードレースなどでも上位に食い込む選手がいましたが、日頃ほとんど経験のない種目には苦戦したようです。先住民族の中でも、伝統的生活様式をどの程度残しているか、あるいは復活しているかの違いがあり、それがここにも影響したといえるでしょう。



▲先住民族競技大会

しかし、会場の内外で世界から集まった先住民族の人々と様々な交流が行われ、当財団の職員たちは、多様な民族文化の復興と発展に取り組んでいる仲間たちが世界中にいるという思いを、あらためて強くしたようです。まさに、参加することに意義がある、ですね。

年間行事表 3～5月

3月	4月	5月
1日(日)	1日(水)	1日(金)
山鼻支院婦人会定例 13:00～ 宮本尊文(札幌市 顯淨寺)	山鼻支院婦人会定例 13:00～ 伊藤孝順(旭川市 昭法寺)	宗祖親鸞聖人御誕生法要 初参り式・花まつり 11:00～ 本堂 山鼻支院婦人会定例 13:00～ 相河朋昭(芦別市 光明寺)
2日(月)	2日(木)	2日(土)
札幌婦人会定例 13:00～ 研修室 出雲路修一(苫小牧市 陽泉寺) 豊白支院婦人会定例 13:00～ 宮本尊文(札幌市 顯淨寺)	札幌婦人会定例 13:00～ 研修室 皆田法士(札幌市 清風寺) 豊白支院婦人会定例 13:00～ 伊藤孝順(旭川市 昭法寺)	札幌婦人会定例 13:00～ 研修室 金石晃陽(蘭越町 光福寺) 豊白支院婦人会定例 13:00～ 相河朋昭(芦別市 光明寺)
3日(火)	3日(金)	3日(日)
現来寺支院婦人会定例 同上	現来寺支院婦人会定例 同上	現来寺支院婦人会定例 同上
4日(水)	4日(土)	4日(月)
北三条支院婦人会定例 同上	北三条支院婦人会定例 同上	北三条支院婦人会定例 同上
5日(木)	5日(日)	5日(火)
円山支院婦人会定例 同上	円山支院婦人会定例 同上	円山支院婦人会定例 同上
6日(金)	6日(月)	6日(水)
北支院婦人会定例 同上	北支院婦人会定例 同上	北支院婦人会定例 同上
8日(日)	8日(水)	8日(金)
開基現如上人御命日法要 13:30～ 本堂 牧野欣胤(別院職員)	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14:00 大谷ホール 開基現如上人御命日法要 13:30～ 本堂 青木悟人(別院職員)	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14:00 境内 開基現如上人御命日法要 13:30～ 本堂 延塚圭太(別院職員)
		おつとめ教室 15:00～ 本堂 札幌別院職員
		9日(土)
		ひがほん暮らしの朝市 (札幌市仏教連合会花まつり特別開催) 10:00～14:00 境内
	10日(金)	
	おつとめ教室 15:00～ 本堂 札幌別院職員	
11日(水)		
勿忘の鐘 14:46～ 鐘楼堂 法要 15:00頃～ 本堂にて 坂田智亮(札幌別院輪番)		
12日(木)	12日(日)	12日(火)
大谷婦人会定例法座 春の研修会の為、休会	大谷婦人会定例法座 13:00～ 本堂 亀田 基(新ひだか町 知恩寺)	大谷婦人会定例法座 13:00～ 本堂 中西志香(中札内村 同朋寺)
14日(土)		
親鸞講座 15:00～ 大谷ホール 小泉元瑞(江別市 瑞雲寺)		
		16日(土)
		親鸞講座 15:00～ 大谷ホール 小泉元瑞(江別市 瑞雲寺)
17日(火)		17日(日)
春季彼岸会法要 13:30～ 本堂 寺林彰則(豊浦町 教心寺)		仏教講座「暮らしの中の仏教」 14:00～ 大谷ホール 森 享枝(名越会計事務所)
18日(水)	18日(土)	
同上	親鸞講座 15:00～ 大谷ホール 小泉元瑞(江別市 瑞雲寺)	
19日(木)		
同上		
20日(金)		
同上 梅溪真人(北海道教区駐在教導)		
		22日(金)
		おつとめ教室 15:00～ 本堂 札幌別院職員
	24日(金)	24日(日)
	おつとめ教室 15:00～ 本堂 札幌別院職員	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14:00 境内
	26日(日)	
	ひがほん暮らしの朝市 10:00～14:00 境内	
27日(金)	27日(月)	27日(水)
宗祖親鸞聖人御命日法要 13:30～ 本堂 酒井 智(南富良野町 恵光寺)	宗祖親鸞聖人御命日法要 13:30～ 本堂 中野誠二(帯広市 大昭寺)	宗祖親鸞聖人御命日法要 13:30～ 本堂 寺澤三郎(士別市 教證寺)
28日(土)	28日(火)	28日(木)
同上	同上	同上

永代経・寄贈披露

尊い浄財及び寄贈を賜りました。
ここに披露申し上げます。

○永代経

【北支院】

瀬川 京子 様	白石区 東区	大西 実也子 様	西 区
橋本 耕二 様	東区 三重	小向 キミ子 様	東 区
前田 一廣 様	北区	富山 睦浩 様	北 区
道見 泰憲 様		新谷 泰子 様	東 区

【北三条】

谷口 恵理 様	東区	松田 芳尚 様	東区
萩野 昌利 様	西区	近間 茂 様	東区

○寄贈

【山鼻】

星野 久美子 様 座布団、茶器、花器

各支院 春季彼岸会・永代経法要日程

北支院	3月20日～21日	13:00～	仁禮 秀嗣
北三条支院	3月21日～22日	13:00～	中村 俊風
豊白支院	3月21日～23日	13:00～	吉田 敦史
円山支院	3月20日(14:00)～21日(13:30)～		内藤 光惇
山鼻支院	3月22日～23日	13:00～	渡辺 浩伸
現来寺支院	3月19日～20日	13:00～	伊藤 秀

親鸞聖人誕生法要・誕生児初参り式・花まつり

【法要】

日にち：5月1日(金) 時間：11:00～ 場所：本堂

【初参り式】

受付：10:00～(記念撮影あり。法要は1時間程度)

対象：未就園児

受式志：10,000円(当日受付にて納めて下さい)

申込み：申込み用紙がございますので、ご記入のうえ札幌別院事務所、または大谷幼稚園にお持ち下さい。(FAX可 011-521-4339)

無量寿の会

札幌別院にて毎月2回13時から
お寺で俳句を詠んでいます
講師 荒船青嶺先生に教わります

札幌別院機関紙 令和8年3月掲載句

二人して繭の中なる春の雪	目加田 懋
まつ直ぐに進むと決めた春の雪	三浦 伸子
大空を仰げばのぼる春の雪	増田 植歌
七転び八転び笑ひ春の雪	齊藤 和加
春の雪ゆっくりふはりと逃げやすく	置田 正子

テレホン法話

(011)511-1313

3月前半	智慧光	吉田 法純
3月後半	人身受け難し	長田 了生
4月前半	本当のやさしさ	山本 英丸
4月後半	空しく過ぐる	九谷 知正

『つきあかり 東別院テレホン法話集』より



表紙紹介

Title 白い妖精 (鈿路)
Photo 菊池 恵子

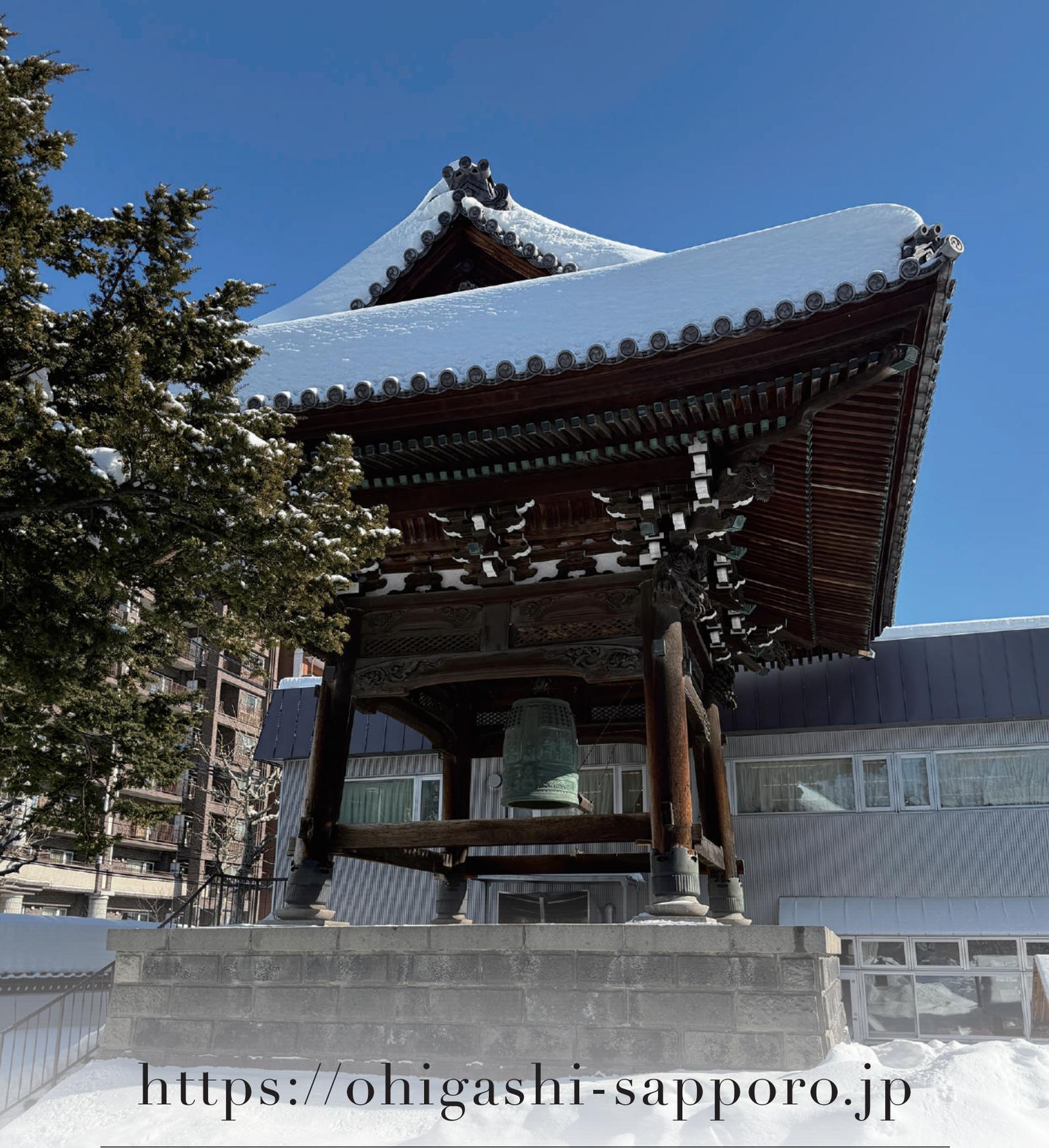
編集後記

「勉強がしたい」最近ふとそんなことを思う。今まで感じ得なかった心持ちだ。勉強することが本分であった学生時代では、全くもって得られなかった感情だ。何故、今なのだろう。もっと勉強に励まなければならぬ時期は過去に山ほどあった。

自由な時間が多かった学生時代。家に帰れば何もせずゆっくり出来る時間があつた。日々の勤め(務め)を果たし帰る場所は、入浴と睡眠場所へと成り下がっている。いわば、何かに追われているのである。特定の個人に任されている内容でなくとも札幌別院での勤めは御崇敬である。出来る限りの報恩の念を尽くすばかりである。

しかし過去に執着し、後悔し、足ることを知らない。知っていても忘れ、求めてしまう。そんな姿に一人の人間であることを気づかされる。「願わくは深く無常を念じて、徒に後悔を貽すこと勿かれ」この身が置かれていた環境に嘆くのではなく、その環境の中でいかに折り合いをつけていくのか。この言葉を思い返すたびに、もう一つ行動する活力になっている。

(P)



<https://ohigashi-sapporo.jp>



東本願寺 札幌別院

〒064-0807 札幌市中央区南7条西8丁目290
TEL.011-511-0502
E-mail. ohigashi@abeam.ocn.ne.jp

地下鉄南北線「すすきの」駅で下車
→市電外回り「東本願寺前」徒歩1分

WEBは▶
こちらから



LINEスタンプ



さっぽろ東本願寺 2026 3月号No.245
(発行人) 真宗大谷派札幌別院
(代表者) 坂田智亮